月報 岡崎の教育

55年度 No.83～94

岡崎市教育委員会

松林ランド

ギラギラとかがやく真夏の太陽が
木々の間から照りつける
枝をはらう、お父さん
草をかる、お母さん
それを運ぶ、ぼくたち、
みんな汗びっしょりだった

だんだんできてくる松林ランド
ここが、ロープウェイ
あそこが落葉スキー場
向こうがタイヤのぼり
マラソンコースの横に
今、新しい遊び場ができる。

木の香も新しい丸太のスタート台
勝ちゃんが飛んだ、
次はぼくだ、台の上に立つ
目をつむって、一、二の三
ヒュー、ターン。やった。成功。

昭和55年４月１日
編集・発行
岡崎市教育委員会

（ロープウェイ　スタート－秦梨小）

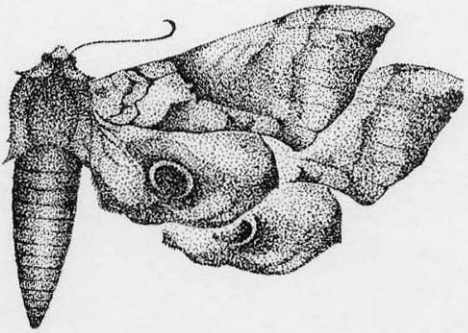
－教育随想－

岡崎よいとこ

今井柳三

大正のはじめに私は二中（今の岡崎高等学校）の教師をしていました。その頃の二中は戸崎町にありまして、後になって今のところに移転しました。平屋建ての校舎で、今のように立派なものではありませんでした。そこで十年間勤めた後愛知女子師範学校へ転任せよという話がもち上がりました。私自身としては、二中にそのまま勤務していたかったのですが、当局の強い指示で止むなく学校を変わることになりました。

それから五十年余も名古屋で暮らしましたが、やっぱり岡崎に魅かれるものがあって、また岡崎へ帰ってきました。ほんとに岡崎はよいとこですね。前に住んでいたのも明大寺でしたが、今も前と同じ明大寺に住んでいます。六所神社のそばですから空気がきれいです。菅生川の清流がよみがえって鯉のおよいでいるのが見られます。また、岡崎の住人は人柄がよいので、それが私には何にも替えがたい岡崎の魅力です。がめつく金儲けなどはしないかもしれませんが、非常に感じのよい人たちばかりです。

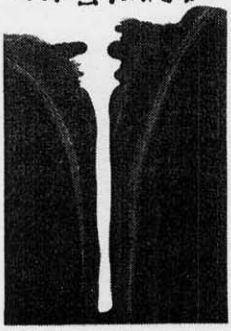


私は散歩をよくしますが、会う人がみんな挨拶をしてくれます。非常に親しみがあって気持ちがよいですね。自宅から六所神社の松並木を通って東岡崎駅へ出ます。それから明大橋を渡って堤を左へ曲り、菅生川の流れに沿って岡崎公園へと歩きます。春は桜、秋は紅葉、藤もよい。菖蒲もよい。目を楽しませ、心を和ませてくれます。お城へ登れば広い西三河平野の全景を見渡すことができて、いつまでもあきることはありません。また、矢作橋から矢作の里にかけての散歩もすばらしいし、東の方へ行くと甲山の辺りにお寺が沢山あります。これは、江戸幕府の頃いざ戦いという場合に砦の役目を果たすようになっていたということで、大きなお寺が同じ間隔で並んでいます。さらに東へ足を伸ばすと、東公園には志賀さんの碑があって、三河男子の気概を読むことができます。ほんとうち岡崎には名所旧蹟がいろいろあって、日曜日には家族がそろって遠足へでも出かける場所には事欠きません。大樹寺から昌光律寺、ちょっと歩を伸ばして岩津の天神さん。真福寺参りから筍御飯、それから廻って滝山寺とよいところがいっぱいです。

こうしてみると、よいことづくめですが、私がいけないと思うこともあります。それは、岡崎には男子の大学が一つもないということです。女子の大学は私立の短大が二校あるのに男子の大学がないというのは残念なことです。子供が成長して、小学校から中学、高校まではよいのですが、大学となると一つもない。以前には教育大学がありましたが、刈谷の方へ移転してしまいました。だから、大学となるとどうしても他市へ行かねばなりません。それもたいていが交通不便な土地にあるので通学に不便を感じています。それに加えて、岡崎は三河の文教都市として栄えてきた歴史と伝統のある町です。こういう意味からも何とかして四年制の一流大学を誘致したいものです。

（元愛知女子師範学校教官）

海外こぼれ話



湿疹のタネ

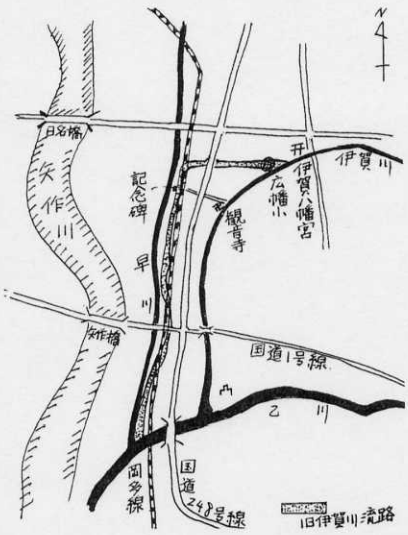
岡田淳子

週末を共に過ごした二人は、男をアンディ（29才）、女をクリス（20才）といった。二人は同棲中で、クリスは看護婦学校へ通っていた。その他に、男が一人と、犬が一匹、同居していた。

二人は菜食主義らしく、肉類を全く食べなかった。彼らの朝食は、各種のタネにオートミールとヨーグルトをかけたものであった。わたしにも熱心に勧めてくれたので、ヒマワリの種、ゴマ、アズキなど、名前もわからぬ種を棚のガラスびんから取り出し食べていた。なんだか自分が鳥にでもなったように感じられて不思議な気分にさせられた。

何日かして、体中に湿疹がでてきたがどうもこの朝食が原因らしい。

彼らの同棲生活は、お互いを尊重し合っているようにみえた。食事も食べたくなったものが勝手に作るようだった。日本でもアメリカのこんな生活が普通になる日が来るのだろうか。最近の手紙によると彼らは別れたそうだ。（竜海中）



—ふるさとの山河—

伊賀川

伊賀川は、田口や箱柳の山間部を曲折しながら西へ流れ、伊賀八幡宮の前から南流し、岡崎城の西を通って乙川に合流する、約八キロほどの河川である。

これは、現在の流路であって、明治末年までは、伊賀八幡宮の前を、そのまま西に流れ、広幡小学校・国道二四八号線の地を横切り、岡多線に接する辺りで南に大きく曲り（大曲りと呼んだ）早川と並んで乙川に合流していた。そのため、城西の低湿地（板屋、田、元能見西、日名町など）は、降水が続くと伊賀川・早川が押し出す水と、乙川から逆流する水とで水位が上がり、破堤・湛水を繰り返し、十日も二十日も湖が出現するほどの被害を及ぼしがちであった。ために、伊賀川の水を早川より上手で乙川に流し、水害の分散減少化をはかる心要があった。

明治四十四年から大正四年にかけて、地元の人々の発意で伊賀川の流路変更と元能見西（連尺小・城北中近辺）の低湿地の水田化が進められ、結果として、伊賀八幡宮の南から洪積台地の西端を堀割って岡崎城の西濠に連結し、乙川に流すという現在の流路が誕生したのである。

旧伊賀川の廃川は桑園・畑地に変わり、大正八年には、その一部が広幡小学校校地として使用されるようになった。

旧堤防の一角には、記念碑「富国の礎」が建っている。碑文には『……工費一万四千弐百円良田実ニ弐拾五町余ヲ得タリ洵ニ聖代ノ美挙ニシテ其恵沢ノ及ブトコロ測リ知ルベカラズ（抜粋）』とある。

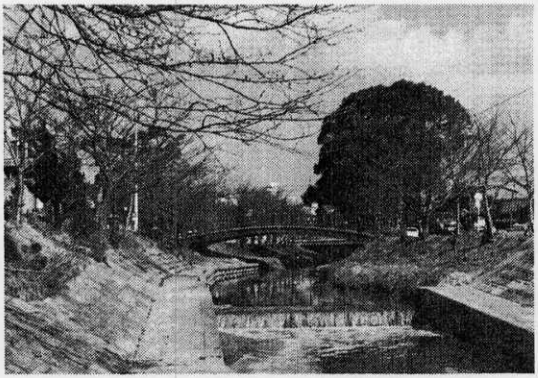
大正・昭和と、時代の進展とともに岡崎の市街地が拡大し、新伊賀川堤防沿いに家が建ち並ぶようになったが、台地下の住宅地化は戦後のことである。

かつて、伊賀川は、上流の採石地から土砂が流出し、ために砂川と呼ばれたり、浅川と称されたりしたというが、その後、砂防と保水のために榛の木や松が植え込まれて川床も安定してきた。

石神橋や伊賀橋近辺の伊賀川の両岸の桜は、まことに見事である。町の花咲かじいさんと言われた、佐々木朝吉翁の手で植えられた吉野桜と右近桜である。春四月ともなると、岡崎公園の桜に勝るほどのすばらしい眺めを見せてくれる。また、流域の住民が率先して「伊賀川を美しくする運動」を進めたおかげで、川の汚濁も無くなり、小魚やシジミが住みつくようになった。

国道二四八号線や国鉄岡多線の開通によって、十年ほど前から急速な都市化が進み、水田地帯だった城の北西部も一変して住宅密集地となった。新しい伊賀川は、世の転変を写しながら静かに変らぬ流れを続けている。

（広幡小　安藤真好）



飯店

石川シイ

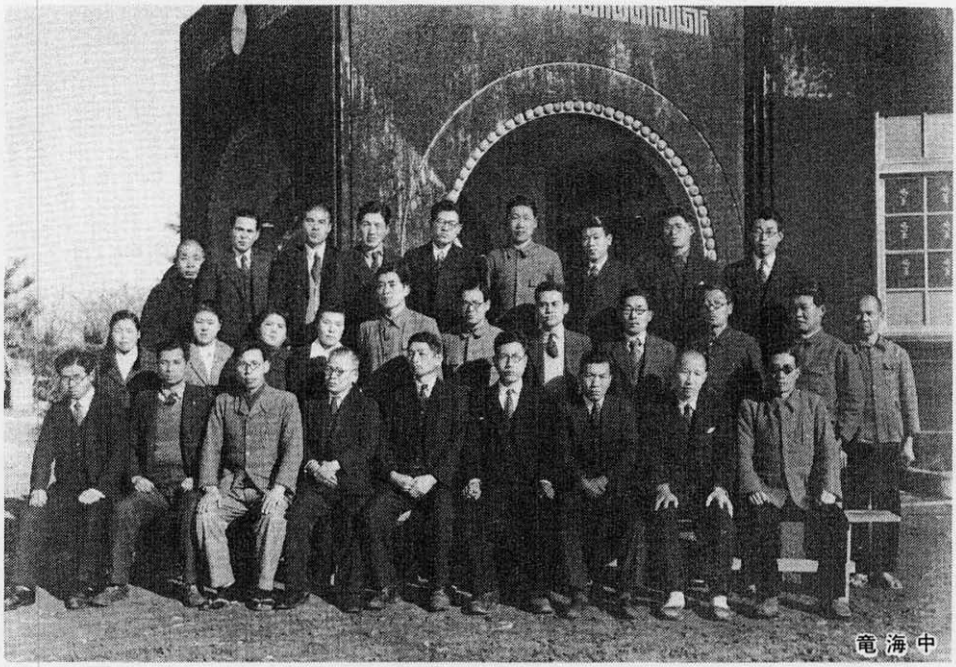
中国では、ホテルのことを飯店といいます。日本では飯店をレストランと訳していますが……。私たちの泊った飯店は上海でも大きなホテルのようで、中国産の高級車「紅旗」を何度か目にしました。

部屋に初めて入った時に、お茶を持って来てくれました。カップのふたをとると、お茶葉入りでした。私たちは、中国式お茶の入れ方を完全にマスターしました。おかわりをするのは、いとも簡単です。熱湯を入れればいいのです。日本式に葉を替え、60℃ぐらいのお湯を入れるのではありません。急ぐと葉が口にくっつくので、少々めんどうでしたが、馴れてくるとけっこういけました。図の③で葉の沈むのを待つのです。

ホテルの中は、まるで迷路みたいで、よくとなりの部屋へ迷いこみました。その部屋にはカギがない。ホテルでカギなしなんて初めてです。空港のフリーパスといい、カギなしホテルといい、この国の旅行団受入れの一断面を見た思いがしました。

（福岡小）

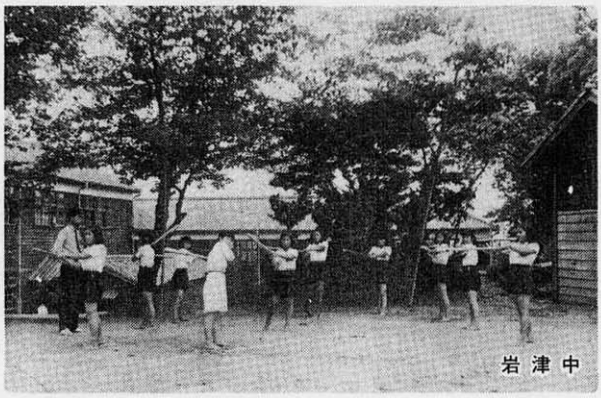
中学校事始


竜海中

昭和二十二年四月、六・三制とか新学制とかいわれて発足した新制中学も、三十余年たった今日ではすっかり定着して、生徒、教師ともども学習や運動にいそしんでいる。三十余年といえば最初の卒業生はもう五十歳になるわけで、今昔の感にたえない。

創設当時の日本は敗戦後の混乱期、物資も資金も乏しい中、占領軍として絶対の権力をふるったアメリカの命令で校舎の建設が進められた。中には小学校に間借りしたり、上郷にあった海軍航空隊の兵舎を転用したり、ガラスのない校舎で、借り物の器具を使っての学習など、苦労の連続であった。苦しかった当時の様子を、写真とエピソードで紹介したい。

福岡中


岩津中

山中、本宿、藤川、竜谷の村議会の決議により『額田郡山中村外三ヶ村学校組合立東海中学校』が設立された。当時は全生徒を収容できず三年生のみ本校舎で学び、他は山中、藤川、竜谷小の各分校に通った。校舎建築については、古釘を伸ばし、材料を持ち寄って建てた。

東海中学校　初代校長　伊藤　安吉

開校当初は、旧岡崎小の校舎を借りており、理科室が職員室であった。昭和二十三年九月に羽根小へ移転。しかも一年生だけは工業高校の校舎で授業した。このため羽根小と工業高校との間を先生は自転車で忙しく行き来した。

南中学校　初代校長　河合　正男

葵　中

校舎がなかったので、六ツ美の三小学校に間借りした。生徒の手による中島崇福寺でのバザーがきっかけで、旧上郷兵舎を購入、校舎に改築し、二十三年九月現在地へ集結した。

六ツ美中　初代校長　加藤曽一郎

校門付近一帯は「亭の山」といわれた岩山で運動場の大半を占めていた。運動場拡張工事にPTA延五五〇人、役員一三〇人、雇人六〇人全校作業二十数回の大工事で、石を全部除くのに数年かかった。生徒は職業教育の名目で岩を崩す作業を連日のように行った。

常磐中　初代校長　浅井　寿治

運動場は昔、大平川の川底であったといわれ、小石がざくざくと出た。この砂利を掘り出してトロッコに積み、一車分いくらで売れるというので、一生けん命集めた。しかしいくら拾っても尽きないので土をかぶせることになった。

夏休みに全校生徒で草を刈って種畜場へ運びそのかわりにトラックを借りてサバ土を運んだ。風呂敷やバケツで運んだこともある。正に汗の結晶といえる運動場である。

美川中　初代校長　鈴木　史郎

二年生になると畜産の必修課目が待っていた。牛を飼養していた生徒達に「産気づいた」という朗報が入ったのは、桜の花の散りかけた頃であった。長い間手塩にかけてきた生徒たちの喜びは大きい。実習時間が過ぎても一人として帰るものがいない。担当のN先生の厳命にもかかわらずその夜、数名が徹夜した。

矢作中　初代校長　都築　禮治

矢作中

香山中

教育日々

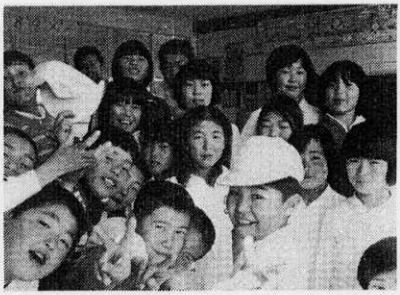
ひとりを認める場

竜谷小 加藤順子

「今日、だれのが載っとる?」学級通信を配るたびに、必ず尋ねる。自分の日記が載っていたら、その場でみんなの前で読むようにしているからである。何か配られるまで期待をしながら待っている姿がいとおしい。子供たちは、みんなに認めてもらおうという気持ちでいっぱいである。

「どろんこ」　Y子

どろんこに毎日書いて
くれるのは加藤先生
忘れずに書いてくれる
私は、〝どろんこ〟にのりたいと思う
でも、へただからのらないのかな
そして、載った時、



「やったぁー、ぼくのだー。」
「わたしのだぁ。」

その反応はさまざまだが、自分をかくせない様子である。

こうすることによって、その子供自身の存在を自覚させ、友だちを認め合う雰囲気が生まれるからである。

わがクラスは、他の学級と比べて、その歩みは遅々としたものであったが何とかまとまりかけたと自負している。

私は教材研究も不十分なまま授業に臨むこともあるのだが、子どもの日記だけは欠かさず見ることにしている。日記を見ない日が続いたら、授業どころではないだろう。日記を通せば、授業で口を開かぬ子の気持ちを読めるのだ。また、思わぬところで思わぬ子が芽をのぞかせているからである。

私自身、日記を読むのが楽しいと感じ、と同時に大事なことであると思う。

これからも、子供の生活の足あとを知る上にも、また、日記を書かせ、一生懸命書いた文にはそれなりにいい所をみつけ、ひとりでも多くの子を認めてやりたい。

これも学級経営の一手段ではないか、と思う。

ワーイ 実験だ、実験だ

大樹寺小 石井洋

キーンコーンカーンコーン
キーンコーンカーンコーン

小走りにして、職員室から理科室へと向かう。理科室の外まで来ると、ワイワイガヤガヤという、狂気とも思われるほどの大きなどなり声、話し声が聞こえてくる。子どもたちは、もうすでに、自分たちが考えた、それぞれの実験方法にしたがって、実験の準備を開始している。

私が入っていくなり、

「先生、電池持ってっていい。」
「ローソクが足りんで、新しいやつを出して。」
「バケツを借りてきていい。」

といったようなさまざまな言葉を一斉にぶつけてくる。

理科の授業について言えば、私のクラスでは、起立も礼もあったものではない。放課のうちから、すでに学習活動が始まっている。

わが五年二組の子どもたちは、理科が大好きだ。なぜか。それは、きっと、理科の活動では、子ども自身の持つ、自然の事物や事象に関する既有知識のすべてがベースになりうるから、と思われる。

この一年、私は、子どもに、「身の回りの物を使い、自分の疑問を解決できるような実験方法を自分で考え、それによって学習を進めてみなさい。」

と言って来た。したがって、教科書類はすべて回収してしまい、いっさい使わせなかった。その方が、子どものもつ、内発的な疑問、発想をより一層生かすことができるように思えたからだ。

その事に対する是非は、私にはわからない。

しかし、私のクラスの子どもを見ている限りは、

1　「私の実験だ。」という意識が芽ばえ、動機づけが著しく高まった。

2　思考の論理性・客観性が高まった。

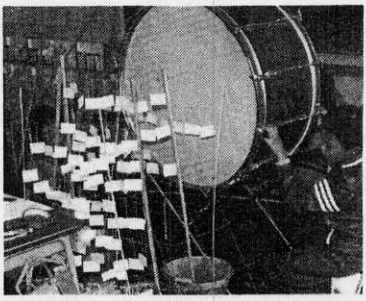
と言えると思う。

初めのうちは、失敗ばかりだった彼らの実験も、音の学習のころには、プリン、風船、磁石（震動に敏感なスイッチ作り）など、大人の頭では、ちょっと考えもつかないようなものを使い、仮説検証ができるようになった。

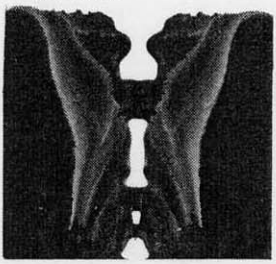
しかし、子どもとの生活が始まって、ようやく二年が過ぎようとしている私にとって、子どもとは、実に不可解な生き物であるし、教育活動そのものが、あまりにも底の深すぎるものに感じられる。

この子たちのためにも、何とかしなければ……。

と焦るばかりの毎日である。



おしらせ



〔寄贈刊行物・資料等〕

◇緑と子ども岡崎の環境緑化
学校環境緑化推進委員会編
学校環境緑化コンクール特選校十一校はじめ市内全校の緑化の現状を写真で紹介。

◇読書感想文コンクール優秀作品集　第十五号　図書館部編

昭和五十五年度学校教育重点目標

基礎・基本の徹底を

広く教育の荒廃が叫ばれている中にあって、岡崎の教育が世間一般から高い評価を受け、市民・父兄の深い信頼を得ているのは、岡崎の教育に携る者が、校長を中心とする和衷協力の研修によって、専門職としての自覚と、技術が向上し、高い識見と実力を有するからである。

本年は、小学校にあっては新学習指導要領完全実施の年でもある。

岡崎の教育者は、学校教育の目標と、新学習指導要領の趣旨を十分理解し、教育者としての使命を自覚し、校長の指導のもとに、ひたすら子どもの方を向き、子どものために、主体的・創造的な実践を進め、子どもの信頼と父兄の期待とに応えなければならない。

本年度の重点は次の如くである。

1、授業時間を欠かさないようにする。

2　行事の精選、割愛に務める。

3　基礎・基本の徹底を図る。

明日の岡崎の教育の担い手

今年の新任教師

〔小学校〕七二名

▼梅園小＝志垣俊朗・山上直之鵜海裕子▼根石小＝早川実・近藤喜美子・高木達哉▼男川小＝後藤真理・山口泰代▼美合小＝酒井君代・阿部哲也▼緑丘小＝畔柳和未・足立修・佐野達美・高木伸子▼岡崎小＝中村裕子▼六名小＝野村こずゑ・岩月裕美子・松井淳子▼三島小＝林えい子▼竜美丘小＝福田育男・寛明美▼連尺小＝太田純子・石川仁志▼広幡小＝山本信幸・佐野恵広▼井田小＝村上芳己・田村実千子▼太田千理▼福岡小＝依馬直子・藤井良一・木村和子・鍔本小夜子▼竜谷小＝日高牧子▼藤川小＝金山敬子・佐々木智子・市川恵子▼本宿小＝金原繁・村松富士子・鈴木渥▼秦梨小＝杉田英子▼常磐南小＝近藤圭子常磐小＝柳澤綾乃・志賀田佳子太田弘▼奥殿小＝内藤好春・尾藤広行▼細川小＝上原健次・柴田和司・蒲野洋二・中村郁夫▼岩津小＝中根康子▼大樹寺小＝金田美子▼大門小＝白浜裕子・佐野敏子▼矢東小＝若杉令子・吉村隆司▼矢作北小＝渡辺智枝・磯貝勝・外山加津子▼矢作西小＝渡辺修▼矢南小＝梅景健二・伊東佳美・山中一己・森本宇一▼六ツ美中部小＝橋川真佐栄・神谷知恵子・小嶋厚▼六ツ美北部小＝松原里美▼六ツ美南部小＝内藤敦子▼城南小＝石川修・浦野公一

〔中学校〕二一名

▼甲山中＝小林格・山田恒世・鶴田ひろ子▼美川中＝橋本サエ子・柴田あい子・野田留未▼南中＝山田植也・山本知子▼竜海中＝加藤恵子▼葵中＝中島春美・竹島寛・市川敏彦▼城北中＝小林彰一▼福岡中＝是石英雄▼岩津中＝中島純一・下村佳史▼矢作中＝阿部泰子・牧野弘美▼六ツ美中＝三浦潤一・中山敬子・出口康彦

若さ溢れる

新任教師のつどい

本年四月一日から岡崎市の教師となる人たち九十三名が、三月二十七日から三日間、少年自然の家で研修をした。

日程及び内容は次のようである。

〔第一日〕三月二十七日

▼オリエンテーション▼入所式▼実技研修〈板書実習〉▼体験発表〈先輩教師〉▼映画〈緑と太陽と清流〉▼講話〈鈴村正弘教育長〉▼講座〈新任教師の心得―栗田昭夫校長・浅井千代子先生〉▼歌唱▼懇談

〔第二日〕三月二十八日

▼実技研修〈集団行動〉▼講座〈教師としての資質―糟谷正孝先生〉▼体験発表〈先輩教師〉▼講座〈教師の読書―神谷卓爾校長・教師の研修―権田梅芳校長〉▼映画〈岡崎の教育この三十年〉▼講座〈西三河教育事務所次長粕谷智先生〉▼野外活動〈施設見学及びオリエンテーリング〉▼実技研修〈孔版実習〉

〔第三日〕三月二十九日

▼実技研修〈ひらがな・数字〉▼講座〈新任教師に期待する―鈴木依治校長〉▼講話〈藤井清補佐・鈴村正弘教育長〉▼清掃▼退所式

◆初めは幾分緊張していたが、体験発表での失敗談やユーモアのある話で、気分もほぐれた。同じ釜の飯を多くの人たちと食べ、同期生としての親しみがわいてきた。だらだらした学生生活とちがった充実した三日間だった。

◆実技研修の孔版は夢中だった。あっという間に時間が過ぎ、気がついたらもう十時。失敗し修正し、やっとでき上がった自分のプリント。おせじにもうまいとは言えないが、刷り上がったものを見ると、何となく楽しい。

◆朝早くから夜おそくまで、寝食を忘れた係りの先生方に感謝します。

こういう先生方が、いらっしゃるから、岡崎の教育は評判が高いのだろうと思います。とてもこんな先生方のまねはできないと思いますが、三日間の講習内容をこれから十分生かしていきたいと思います。

いぼあらひ前
公徳水

所在地－岡崎市秦梨町

河合中学校の下の信号から、乙川を少しさかのぼると、道が大きく右手にカーブし、足下に美しい溪谷が見えてくる。秋深まるころは、対岸の紅葉が一段と映えて見える。実は、このもみじは自生のものではなく、乙川電力の発電所跡のものである。

ところで、このあたりの河床の岩盤に、土地の人たちが『いぼあらい』と称する、年中水の乾あがらない小さな水たまりがある。ここの水でいぼを洗えば必ずとれるという。

河合の里は、碑が多い。ここにも、『天恵水』と刻んだ石塔がたてられていたが、度々の洪水でよく転んだり、流されたりして、今は台座の跡しか残っていない。しかし、県道沿い、わき水のそばに、小さな地蔵尊のほこらと並んで、『公徳水 いぼあらひ前』と河原石に刻んだ案内標示の碑がたてられており、この里の人情にふれる思いがする。

●題字　岡崎市長　内田喜久
●タイトルバック　緑丘小　野田光
●カット　大樹寺小　香村敏之

オアシス

「おはようございます！」元気な一年生の声、このあいだ入学した新入生も、もう一人前の中学生の顔に見える。部活動もはじまった。

「球拾いばかりでつまらんなあ。」とA男がつぶやく。がんばれよ。今に君たちの時代がくる。その日のために、力を貯えておけよ。

新緑が陽に映えて美しい。ある気象学者は、「木々の緑には未知の活力素が含まれている」と主張しているが、たしかに緑には人をなごませる何かがあるようだ。

その緑を求めて郊外へ出る。木の種類によって新緑にも差があるようだ。もう少し汗ばむ。まだ日は高い。春日遅々。

新しい読者のみなさん、新しい出会いに感激の毎日をお過ごしのことでしょう。子ども達も、みなさんの若さに憧れ、熱意にうたれて、生き生きとしていることと思います。あたたたちが、ベテラン教師に太刀打ちできるのは、無名で、貧乏で、若さがあるという点です。

新任教師、ガンバレ！

スカンポ花咲く田んぼ道。頭上を飛び交うケリの声。

春は、今、たけなわ、のんびりとセリつみでもしたくなるが、そこが教員稼業の因果で、学区地図を片手の家庭訪問。何から何までがスタートで、忙しい忙しい。せめて、春の匂いだけでも、腹いっぱいかぎましょう。「ウーン。」

この本を

○プラハからの道化たち	高柳	芳夫
講談社	¥	890
○天平の甍	井上	靖
中央公論社	¥	580
○粋と野暮のあいだ	高橋	義孝
P・H・P	¥	980
○勤勉の哲学	山本	七平
P・H・P	¥	980
○おもしろく源氏を読む	角田 文衛 中村真一郎	対談
朝日出版社	¥	960
○ドキュメント日本の教育	角間	隆
佼成出版社	¥	980
○北の波涛に唄う（江差追分物語）	木内	宏
講談社	¥	980
○立ったら歩きなはれ	後藤	清一
P・H・P	¥	880
○死を急ぐ子どもたち	高杉	晋吾
三一書房	¥	1,300
○男子の本懐	城山	三郎
新潮社	¥	1,200